

デリダは『フッサール哲学における発生の問題』において 自身の企図を完遂しているのか

——還元論と否定論を中心としたフッサール/ハイデガー評価の再検討——

中谷 碩岐¹

(大阪大学)

本論は、ジャック・デリダのDES論文『フッサール哲学における発生の問題』(執筆1953-54年、刊行1990年、以下『発生の問題』)におけるフッサールとハイデガーへの評価について、特にその「還元」と「否定」を巡る議論を中心に検討することで、この著作におけるデリダの企図を整理し、その成否に関するひとつの仮説を提示するものである。

『発生の問題』は『算術の哲学』から『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(以下『危機書』)に至るフッサールの著作を総覧するモノグラフであるが、この著作におけるデリダの議論がフッサールとの間に取り持っている関係は、控えめにいっても単純ではない。一方で、フッサールが最期まで「発生」という位相——ここではさしあたり、経験やその最終的な基盤そのものの発生過程を指す——の適切な把握に失敗したとみなすデリダの立論上、この著作においてフッサールに対する批判は中心的なものであり、議論の前提をなしているとさえいえる (cf. PG125/311)。その上でデリダは、フッサールの超越論的現象学に対して「弁証法」を巡る自身の哲学、すなわち「発生の哲学」を重ね刷りしていた。議論を先取りして述べれば、そこでデリダは、フッサールが明らかにしようとした超越論的発生の根底に「人間的実在 (réalité humaine)」を位置付けることになるが、その立論は (サルトルの実存主義的

1. 大阪大学人間科学研究科博士課程/ (独) 日本学術振興会特別研究員 DC1

読解を前提とする) ハイデガーの影響下にあるものとして理解することができる²。それゆえデリダの言葉を借りつつ『発生の問題』の議論を「フッサールの現象学からハイデガーの存在論へ」(PG30/295)の移行の軌跡であるとみなすことも、あながち間違いではないだろう³。

しかし、こうした図式は、見かけほど単純ではない。たしかに、『発生の問題』におけるハイデガーの寄与分はけっしてちいさいものではない。しかしデリダは常に、自身の企図に対するフッサールの不同意を恐れつつ、以下のように自身の企図を「フッサールへの忠実さ」に則ったものとして説明していなかっただろうか。

フッサール主義に対する古典的な諸解釈を前にして、明示的に弁証法的な見方を弁護することで、われわれはフッサール主義の精神に忠実であろうとしているに過ぎない。(PG32/38)

「われわれは現象学的な意図に忠実であるだろう」(PG33/39, cf. PG275/274)とも言い換えられるこうした表現において、デリダは自身がフッサールの超越論的現象学のパトスを継いでいることを隠さない。しかしだとすればなぜ、どのような点で『発生の問題』のデリダはフッサールを批判するのか。デリダの明示的な結論がハイデガー的なものであるとして、それはなぜか/どのような点においてであるのか。その議論の展開によって『発生の問題』は自身の企図を完遂しているのか。本論ではあえてこうした基礎的な問いに立ち戻りつつ、『発生の問題』において提示されるデリダの立場が、フッサールとハイデガーとの間に有している関係について再検討し、その錯綜した図式を整理した上で、この著作の企図、そしてその成否を検証することを試みる⁴。結論からいえば本論は、『発生の問題』はその結論における「人間的実在」の強調

2. この点について、Lawlor2002 や櫻田 2024 を参照。後にデリダが「人間の目的=終わり」(1972)において批判的に振り返っているように、この語はアンリ・コルバンによって「現存在 (Dasein)」の仏訳として採用された訳語であり、サルトルによる理論化を介してフランスにおけるハイデガーの実存主義的解釈に大きな影響を与えた。

3. とはいえ、従来の『発生の問題』を扱う研究では(『発生の問題』本文におけるハイデガーへの明示的な参照の少なさもあってか)デリダの議論をそのフッサール読解(あるいは批判)に内在的に論じるものも多い(荒金 2005、鈴木 2010、桐谷 2021)。

4. なお、本論ではデリダによるフッサール解釈の当否について検討することはできない。本論の関心は、あくまでもデリダ自身の企図の中で「フッサール」「ハイデガー」という道具立てがどのように配置されているのか、そしてそれらはうまく機能しているのかという点に存する。

によって、自身の本来の企図たる「発生の主題化」を完遂することができていないと主張することになるだろう。

1. 『発生の問題』におけるフッサールの観念論への批判

はじめに本節では『発生の問題』におけるフッサールへの評価を総括し、それが「観念論」に対する批判という図式のもとで理解可能であるということを確認する。

1-1. 『発生の問題』における観念論批判(1): 『イデーニ I』を中心に

本節では、特に『イデーニ I』と『経験と判断』に関する議論を中心に検討したい。

デリダによれば、『イデーニ I』は先立つ『算術の哲学』と『論理学研究』が有していた心理学主義と論理学主義の二項対立が引き起こす困難を解消するものとして提示された。しかしデリダは、そこでフッサールが展開する議論は、超越論的主観性が相対する世界を静的な形相において捉え、その意味を構成するとみなすことによって、世界全体を主観性の構造の中へと回収してしまうと主張する。デリダによれば『イデーニ I』においては「超越論的生成の起源とその起源とは、静態的構成の形相的水準において描写されている」(PG142/141) のであり、超越論的な構造それ自体の発生過程については論じられていない。この点においてデリダは『イデーニ I』の構造が実際にはその前提となる「超越論的発生」を主題化せず、「発生の観念論的排除」(PG133/132) を行っている、と批判するのである。

こうしたデリダの批判が依拠しているのは『イデーニ I』第 49 節における世界無化 (Weltvernichtung) の議論であり、デリダはこの箇所にもフッサールの「絶対的観念論の企図」を見出す (PG144/144) ⁵。この箇所においてフッサールは、意識に対して超越するものとして現れる実在的存在 (世界) は想像変更によって無化することができるのに対して、私たちの体験の基礎としての自我は、還元を経ても現実存在を失わない「現象学的残余」であるということを強調していた⁶。絶対的意識の領野をあらわにするこの無化の契機こそ現象学的/超越論的還元であるが、この操作をデリダは「ある

5. 『イデーニ I』第 49 節を基軸としてフッサールの「観念論」を指摘し、批判するというデリダの立論は、その後もしばしば繰り返されるものであるが、ここでその議論を追うことはできない。

6. こうしたフッサールの「世界無化」の議論については、植村 2018 が詳しい。

意味が有する事実的内容を排除することによってその意味の「形相」の純粹さを抽出する」(PG114/113) 操作として解釈し、批判する。デリダが依拠する『イデーニ』仏訳者のポール・リクールによる指摘に従えば、この場合「還元は […] 世界の意味を見出す超越論的な構成と区別できなくなる」(PG140/139) のであり、その結果この構造は「文字通りに起源的な構成についての一切の探究」(PG141/140)、すなわち超越論領野に先立ち、その諸要素自体を構成する「超越論的発生」について議論する可能性を閉鎖してしまうのである。

こうした困難は、特に時間という主題に関して顕在化する。『内的時間意識の現象学』(1904-1905) において論じられていた過去把持・未来予示・原印象の統一によって構成される時間的対象は、それが意識に与えられたものの現象学的分析である以上、意識から切り離されて実在するものではありえない。しかし「音の感覺的あるいは質料的与件は、主体の作用によっては構成されない」(PG121/120) 以上、こうした時間的対象は、還元されたはずの実在的な時間を前提にする。すべての体験は時間的である以上、同様の構造を有するが、このとき、意識を開示する還元という運動自体も時間的な経験であるがゆえに、この時間を前提としているはずである。したがって還元は、それに先立つ現実的な発生に関する位相、すなわち「超越論的発生」の主題化を必要とするはずであるだろう。

にもかかわらず、『イデーニ』のフッサールはこうした契機について議論しない。それゆえデリダは「この現象学的還元は、フッサールの意図にもかかわらず、現実的発生の還元および隠蔽であり続けることになるだろう」(PG40/46) と述べる。この点においてデリダは『イデーニ』の議論の革新性を認めつつ、それが「主観的かつ形式的な観念論」(PG145/144) に留まり、その根拠にある現実の発生を適切に捉えられていないと批判するのである。

1.2. 『発生の問題』における観念論批判 (2) : 『経験と判断』を中心に

こうしたデリダのフッサール解釈は、諸々の変化を経つつも、おおむね論旨を同じくするものとして「発生的現象学」の時期の議論、具体的には『経験と判断』や『危機書』の解釈にも差し向けられることになる。ここでは『経験と判断』を中心に、その内容を確認したい。

デリダによれば、『経験と判断』は「前述定的明証性の世界を起点とした述定の発生」を議論するにあたって「それ自身として予め与えられた諸対象の明証性の水準」と「それらの対象を基盤にして遂行される述定的作用の水準」の二層構造を提示していた (PG182/181)。しかしデリダは、ここで経験の基盤として論じられる「世界 (生

活世界)」の二義性とそれが帰結する困難を指摘したうえで、フッサールがそれを解決する方法を批判する。一方で、この世界は、意識による規定を超えた「実在的基体」(cf. PG183/181)という性格を有するものであり、いかなる述定的規定をも有さない、前述定的な審級である (cf. PG187/185)。しかしこの場合には、学問の対象としての理念の対象は、単に実在的な世界を隠蔽してしまう二次的な「理念の衣」であるとみなされてしまうだろうとデリダはいう。「[フッサールが諸学の基礎として取り上げる]論理学の超越論的と称される発生は、前述定的な現実存在の露出を隠蔽する詐術による制作でしかないことになる。これは、前述定的世界を述定の絶対的かつ唯一の基礎とする定義から厳密に生じる残念な帰結である」(PG189-190/188)。前述定的位相としての生活世界は、逆説的にも空虚なものに留まってしまう。

しかし他方で、こうしたある種の形式主義を回避しようとすれば、前述定的であったはずの世界という審級に何らかの規定を与えざるを得ない。このような規定は、生活世界を特徴付ける「前述定性」という性格を無にしてしまうように思われる。この世界という主題が我々の可能な経験を全て前述定的な位相において基礎付けるものであるということを鑑みれば、こうした議論はまた認められない。デリダが参照するように、世界に関するこうした立場は共にフッサールによって部分的に主張・擁護されているものであるが、双方ともに困難を帰結するのである (cf. PG191-/190-)

こうした困難を解決する装置として導入されるのが「カント的意味での理念」と、それと相関する「目的論」であるとデリダは述べる。この概念は「有限の道程を無際限に続けた延長線上における無限の極」という、そこに至るまでの道程を統制する統制的・目的論的理念を意味しているが⁷、デリダによれば『経験と判断』においてこの主題は「可能な諸経験の無限な土壌」(PG39/296)として、上記の「世界」を定義するために導入される。「無限の極」としての世界概念によって、私たちの学問的営為によって到達される知識は、それが常に暫定的なものであることを認めざるを得ないとしても、常に同一の世界の解明を目指して漸進しているという点において、その価値が保証されるのである。

紙幅の都合上ここで十分に詳しく論じることはできないが、デリダの解釈に従えば、この世界を巡る議論は、『危機書』等の著作における学問の理念化の運動の基盤として、最晩年まで保持されることになる (cf. PG206/204-205)。『危機書』においては、こうした理念は、実際の学問的営為を行う学者たちがこうした理念の「自覚」を通じて真の学問を形成する運動へと従事し、その主体性と合致する(べき)ものであ

7. 『発生の問題』における「理念」の意味については、長坂 2012 が詳しい。

るとみなされる。「純粋な超越論的自我は、その目的論の純粋な生と一体を成すことになるはずなのである」(PG220/218)。

しかしデリダの見立てでは、こうした理念を巡る議論は、最晩年のフッサールによる観念論への回帰を示している。なぜなら、まさに「危機」という事象の存在が示しているように、実際にはこうした無限な理念は有限な実際の学問的営為によって達成されることはなく、それゆえ逆説的にも、フッサールはその理念を「忘却された」「歴史的理性」の蘇生を目指すという形式的な目的論においてしか描写することができないのであるから。それに対しデリダは、理念によって歴史をその意味へと還元するフッサールの議論が「危機」の原因を説明することができないのではないかと疑義を呈する (cf. PG249/248)。そして、こうした「理念」とそれに基づいた「目的論」は『イデーニI』が陥った「現実存在によって意味が発生する過程の隠蔽」という立場に回帰してしまう、とデリダは述べるのである。

2. 『発生の問題』における還元論と否定論：フッサール批判とハイデガー評価

それでは、こうした批判の後に提示されるデリダの立場は、どのようなものなのだろうか。デリダはどのような点で、フッサールではなくハイデガーを評価するのか。ここでは「還元」に関する議論を検討することから議論を始めたい。というのも、この論点にこそデリダのフッサール批判とハイデガー評価の分かれ目が存在するように思われるからである。

一方で、前節で確認した通り、デリダは、現実存在をその意味において議論する超越論的観念論を超越論的発生の位相を十分に主題化していないとして批判する。それゆえデリダは、その方法論たる「超越論的還元」に対しても批判を向け、発生という主題が還元回収されず、それに対して権利上先行していることを強調する。引用しよう。

フッサールの最も深い意図に合致した完璧な超越論的還元は、発生の還元不能な現実存在を前にして、挫折しないだろうか。[...] 超越論的発生とは、還元自体を起源的な仕方可能にするところのものではないだろうか。そうだとすれば、還元はもはや意味にとっての最終的基盤や絶対的起点ではなくなるだろう [...]。現象学の意味の全体は [...] 超越論的還元の純粋な可能性にその根拠を持つのだが、しかし他方で還元は(その本質からして)

超越論的発生に到達しないばかりか、それによって構成されその中で現れる […]。 (PG28-29/33-34)

前節で確認した通り、ここでデリダは超越論的還元を、超越論的発生を隠蔽する観念論の一部として批判的に捉えている。そして、こうした還元に戻されず、その契機を可能にする「現実存在」「超越論的発生」の解明こそが取り込まれるべき課題であるとされるのである。

しかしながら他方で、本論にとって興味深いのは、デリダがこうした批判と同時に、この「還元」という操作的概念を端的に放棄するのではなく、それを改鑄する議論の可能性について示唆しているということである。実際のところ『発生の問題』の主題を予告する序文においてデリダは、超越論的還元を上で述べた理由によって批判しつつも、同時にその「方法の調整」を、フッサール現象学の「乗り越え」を行おうとする際に着目すべき契機として、部分的に評価していた (cf. PG41/46)。そこでデリダは、フッサールが「還元」の改鑄を行わなかったことを批判しているが、この主張は翻ってデリダが、フッサール現象学において不十分だった発生の主題化を成就する「真の超越論的現象学 (une authentique/véritable phénoménologie transcendentale)」 (PG138, 156/137, 156) を志向するにあたって、この「還元」という位相に着目していたことを示している。

実際のところこの「還元」への二重の評価は、『発生の問題』「序論」においてデリダが、現象学的観念論における還元を「最も一貫性に欠け最も付随的な形相的還元」と呼びつつ、それに対して「真の超越論的還元」 (PG28/33) という審級を対置していることから、意識的なものであると考えられる。その最もよい定式化を、この著作においてはじめて超越論的発生の主題が言及される決定的な一文において見出すことができるだろう。いわく、発生は「原則として一切の還元を抵抗し、[しかし] 正しく理解された一切の還元によって明らかにされるかもしれない」 (PG5/5) ⁸。発生を主題化するには、なおも還元の契機が、より正確に言えばその改鑄が必要不可欠なのであり、既に構成された意味や主観性をすら還元するに至るまで「還元」を徹底することが必要なのである。

しかしそうであるとすれば、このように改鑄された還元はどのような契機において見出され得るのだろうか。言い換えれば、ここで問題となっている超越論的な発生

8. 松田 2020 は、従来のほとんどの研究においてこの『発生の問題』の現象学的還元の両義性は見落とされてきたことを指摘した上で、この両義性を適切に指摘している (松田 2020:21) が、その内実については論じていない。

は、どのような経験において立ち現れるのだろうか。『発生の問題』において、デリダはこうした契機を『経験と判断』における「否定」の議論の中に見出している。引用しよう。

この〔「否定」という契機の〕分析の意義は、それが、フッサールによって絶えず描写される発生のふたつの極——「前述定的受容性」と「論理的能動性」、超越論的受動性と超越論的能動性、受動的ドクサと様態化された明証——等々の間の中間的契機を定義することをフッサールに課すように思われる点、そしてその契機が発生それ自体の契機であるかもしれないという点にある。(PG196/195)

ここでデリダは「発生」を前述定的位相からの論理的位相の発生として把握し、その内実を「否定」という契機に見ていた。そして議論を先取りすれば、この点においてデリダは、フッサールから離反し、ハイデガーへ接近することになる。以下、その理路を確認したい。

まずはデリダのフッサール解釈を確認しよう。デリダによれば、否定の議論が展開される『経験と判断』において、現象学の最終的な基礎審級として論じられる前述定的な生活世界は「絶対的に起源的な明証性」(PG195/319)を有するのであり、そこで否定の契機は一次的な位置付けを有さないとみなされている。それゆえ一方で「否定には、前述定的領野へのその帰属にもかかわらず、どんな起源性も与えられることはない」(PG196/195)。しかし他方で、否定を単に判断に属すると考える場合、それは単に心理学的偶然の所産とみなされてしまう。しかし、フッサールが述べる通り「否定は述定的判断によって初めてなされるものではなく、その起源的形式はすでに受容的経験という前述定的領野のなかに居合わせている」(EU97)。それゆえデリダの言葉を借りれば「否定はその純粋性においては限定された諸契機のいずれにも帰属しない」(PG196-197/195)。デリダに従えば、フッサールにおいて「否定」は前述定的世界に属しつつそこで積極的な位置を有さない、いわば二次的なものなのである。

それに対して『発生の問題』のデリダは否定を一次的なものと解釈しようとする。本論にとって興味深いのは(十分に明示的ではないにせよ)『発生の問題』のデリダがこの否定の契機を「還元」と重ね合わせているということである。引用しよう。

否定や失望の可能性なくして志向や志向性は不可能であろう。中立化は起源的にはひとつの「失望」なのではないか。すなわち「私」が事実性を、そ

の現実存在を否定しないまでも、「断ち切る」瞬間なのではないか。[...] 受動性から超越論的能動性への移行 (transition) は一つの「否定」なのではないか。フッサールの諸分析に従っているのみでは理解がきわめて困難であるこれらすべての「通路=移行 (passages)」の中で、否定は媒介の役割を果たすのである。否定は、そのものとして、あらゆる発生の原動力であり運動であるように見える。(PG197/195)

さしあたり、ここで述べられている「中立化」は「還元」と重なるものとして理解してよい⁹。先にデリダがフッサールにおける還元を改铸することによって、超越論的発生を把握する議論の可能性を示していたことを確認したが、ここでデリダは、この還元を否定の一種である「失望」の契機と重ね合わせた上で、その契機を受動性から超越論的能動性への「通路=移行」、あるいは「あらゆる発生の原動力であり運動」として、すなわち超越論的構造の発生を可能にする契機、あるいは超越論的発生そのものとして取り上げていることは注目に値する。言い換えれば、デリダの解釈において、この「否定」という契機は、超越論的領野それ自体を開く還元という操作、あるいは超越論的領野の「発生」と重ね合わされ、それゆえに、一次的な役割を有するものとして評価されているのである¹⁰。

そしてこの点に『発生の問題』のデリダが、フッサールではなくハイデガーを評価する理由が存在する。「フッサールの諸分析に従っているのみでは理解がきわめて困難である」と述べられるように、この点においてデリダは、フッサールから離反するのである。実際のところ、デリダによれば「フッサール哲学のなかにはこの〔否定の〕契機のための場所がない」(PG196/320)。なぜか。デリダによる簡潔な要約を引用しよう。

フッサールは、純理的な超越論的主体を起点として否定という現象を描写しようとするので、具体的で存在論的な態度（この態度のみが論理的・述

9. 厳密に言えばフッサールにおいて「中立化(中立性変様)」と「還元」は微妙に異なるが、デリダ自身は「コギトと狂気の歴史」(1963)のようなテキストにおいて両者を重ねて論じているため、本論では両者を重ね合わせて解釈した(ED93/128-129)。

10. ここでデリダの議論は、存在論的な順序で生じる超越論的領野の発生と、認識論的な順序で生じる超越論的領野への還元を、同時に「否定」という契機のうちに見出すという独自の戦略によって、本質的な曖昧さを有しているように思われる。こうした曖昧さは「弁証法」におけるそれと同型であるだろう。

定的起源から否定を救うのである)を引き合いに出すことを強いられるや否や、心理学的観点からそれをせざるをえない。失敗や失望などはいかなる超越論的規定をも有さないのである。したがってそれらは純粋に経験論的である。これがまさに、フッサールとハイデガーを引き離す差異である。ハイデガーにとって超越論的主体は起源的に存在論的であり、このことが、否定の心理学的でも論理的でもない起源を彼が描写することを可能にする。(PG196/320)

ここでは、超越論的発生の契機としてデリダが評価する「否定」の議論について、フッサールがそれを超越論的領野から切り離して経験論的なものとみなし、積極的に評価していないということが指摘されている。前節で確認したように、フッサールは超越論的領野において「否定」に積極的な地位を与えていない。実際のところ、フッサールは『経験と判断』において「それ自身として予め与えられた諸対象の明証性の水準」から議論を出発していた。「原信憑 (Urdoxa)」とも言い換えられるこうした世界の存在への確信を基底に据えるという議論の構成上、超越論的領野に関するその議論において否定が積極的な場所を有することはできない。そして先の引用においても言及されているように、デリダにとって、このフッサールによる「否定」の主題化の失敗は、フッサールが常に「純理的な超越論的主体」を基軸として現実を把握する点、すなわちフッサール現象学の観念論的性格に起因する。ここに『発生の問題』における観念論批判のひとつの理由を見出すこともできるだろう。超越論的能動性を基礎とする現象学的観念論においては、否定の一次的な性格を十分に評価することができない。この点に「フッサール論理学にとっての最も重大な障害」(PG67/301)を見出すデリダは、この否定の論点を現象学的観念論の限界とみなすのである。

それに対してデリダは、「現象学的なアプリアリな総合は、根本的でノエマ的体験よりも起源的な、存在論的なアプリアリな総合によって可能になるのではないか」(PG120-121/119)と問いかけ、むしろ存在論的な「無」を議論の根底に据えるハイデガーの存在論を評価する。「ハイデガーの存在論は、この〔フッサールの〕志向的現象学を転倒させる。「不安」は起源的なものであり、絶対的な存在論的無限定を前にした実存的「後退」を可能にする」(PG67/301)。先の引用において述べられている通り、ハイデガーが評価されるのは「否定」「不安」の一次的な主張を、存在論的な枠組みによって可能にした点においてなのである。

そして、こうした議論の中核に存在するのが「みずからの本質と弁証法的に一体をなしてあらゆる還元を抗する人間的現実存在 (l'existence humaine)」(PG41/46)にほ

かならない¹¹。この現実存在は、その本質において、否定を介して超越論的領野を開く可能性を有しており、その点において内世界的かつ超越論的なものである。弁証法的な性格を有しているこの位相が、否定の契機の基礎となるのである¹²。

3. 人間の実在は超越論的現象学の基礎となり得るか？

一度議論を整理しよう。ここまで本論は『発生の問題』の議論を、①フッサール現象学の観念論的性格を批判し、②そこで十分に把握されない「否定」＝「還元」の位相を超越論的発生と重ね合わせた上で、③その基礎を「人間の実在」に求めるものとして解釈してきた。それでは、この議論を『発生の問題』の最終的な結論として理解することができるだろうか。その議論によってデリダは「発生の主題化」という自身の企図を完遂しているのだろうか。われわれの仮説では、答えは否である。というのも「人間の実在」というこの審級において「発生」を説明しようとするデリダの企図にもかかわらず、そこでその性格たる「弁証法」は適切に把握されていないように思われるからだ。

順を追って確認しよう。ここで「弁証法」とは、内世界的な現実存在と超越論的な意味が有する相互依存の関係を指すものとして理解してよい。本論の考えでは、ここで論じられる「人間の実在」は、それが本質的に有する「否定」や「不安」の契機において内世界的領野の還元と超越論的領野の開示を含んでおり、その点において「否定」に一次的な性格を与えると同時に、内世界的領野と超越論的領野の相互依存関係をその性質として有する。デリダの言葉を借りれば、この審級は「存在が弁証法的に「対目的」主体となり、起源的時間性を引き受け、そして弁証法の必然性と独自の有限性を引き受ける、その場所」(PG257/256)にほからならない¹³。別の箇所でもデリダが「生成が起源的にみずからを構成し、「私」が起源的にみずからを時間化する」「私」が自己自身に内在的であり続けながらも絶えず自分自身の外に立ち現れる」

11. 管見の限りでは『発生の問題』において「人間の実在 (réalité humaine)」と「人間の現実存在 (l'existence humaine)」に厳密な使い分けはなく、同一の事柄を指すものと考えられるため、本論では両者を区別せずに論じる。

12. 実際のところ、『発生の問題』「序論」において、こうしたハイデガーの「不安」の契機は、明示的にフッサールの「還元」と重ね合わせられていた (cf. PG30/295)。

13. 原語は「L'existence humaine où l'être devient dialectique...」であり、邦訳にならって関係代名詞から「～する場所としての人間の現実存在 (=人間の実在)」と解釈する。

(PG150/150) と述べる時、この「人間的實在」は発生の運動たる弁証法の基礎として、いわば最終審級としての位置を与えられているように見える。

しかしながら、この「人間的實在」の称揚は、弁証法を実質的に停止させないだろうか。もちろん本論は『発生の問題』がその企図において、弁証法を停止させることのない議論を展開しようと試みていたことを否定しているわけではない。実際のところ、デリダが慎重にハイデガーの実存分析から距離を取っているように、この「人間的實在」が評価されるのは、それがこの弁証法的性格を有し、それを停止させない限りにおいてであり (cf. PG257/326-327)、この意味で、それが単なる観念論に対する實在論の称揚ではありえないことは、随所で強調される。しかし、デリダがこうした弁証法の「場」として「人間的實在」を置き、弁証法をその性格としてみなすとき、それでもなお、こうした弁証法がある「主体」へと帰属させられることには変わりないだろう。実際のところ、ある箇所では弁証法を「引き受ける (assumer)」こと¹⁴、その「自覚 (prendre conscience)」についてデリダが述べる時、その前提に主体の影を見出さないことは難しい (cf. PG257/256)。このとき、二項の動的な関係であった弁証法は、「人間的實在」というひとつの項によって止揚されてしまうように、われわれには思われる。このとき、その企図と警戒にもかかわらず¹⁵、デリダは発生の弁証法的運動を、フッサールとは逆の方向において、そしてより巧みな仕方で裏切ってはいないだろうか。すなわち、超越論的観念論がこうした弁証法を「現実存在」をその「意味」へと還元することで停止させるのに対して、デリダは「意味」と「現実存在」の弁証法自体は保持しつつも、それを「人間的實在」を基礎とする「存在論的発生」へと帰着させ、還元の契機を排除することによって、弁証法の運動を停止させてはいないだろうか。

すくなくとも、『発生の問題』の立論にある非対称性が存在することは事実である。フッサール現象学の観念論的性格を繰り返し批判し、それに対して「人間的實在」や「存在論的発生」が有する先行性が説かれる一方で、その「現実存在」に対して「還元」や「意味」が有する先行性については、十分に議論されていない。『発生の問題』の議論全体が、フッサールの観念論への批判に貫かれていたことを思い起こせば、こ

14. こうした「弁証法の引き受け」を重視する先行研究として桐谷 2021 を参照。桐谷は、こうした議論を後期フッサールの歴史哲学に対するデリダの解釈と対比しつつ、若きデリダの中心的テーゼとみなしている。

15. たとえばデリダが『発生の問題』「序論」において、自身が結論として提示する弁証法的な図式について、あくまでも「形式的な結論であって超越論的なものではない」(PG6/7) と述べる時、それはこうした警戒の現れとして理解することができる。

のことは不思議ではない。既に確認した通り、「フッサールの最も深い意図に合致した完璧な超越論的還元は、発生の還元不可能な現実存在を前にして、挫折しないだろうか」(PG28/33)と問うデリダにとって重要なのは、「純粹意識への回帰」という観念論的な還元から距離を取ることであるだろう。そしてその態度が「人間的實在」の過度な重視を帰結させたように、われわれには思われる。

しかし、必要だったのはほかならぬ「発生」の契機、すなわち「否定」「還元」という契機の主題化と精緻化であっただろう。その議論は、もし遂行されていたとすれば、超越論観念論におけるそれとは異なる「超越論的還元」の提示、すなわち「超越論的還元の改鑄」という議論をなすはずであっただろう。これこそが、「人間的實在」と対をなす仕方で超越論的発生そのものを把握する「真の超越論的現象学」への道程を開くことを可能にしたらろう。超越論的主観性とそれとしての現実存在に先立ち、それらの「超越論的発生」を主題化するこの新たな現象学において、その方法論を『イデーニI』における「現実存在の、意味への還元」とは異なる仕方で、「真の超越論的還元」として理論化することは、デリダ自身によって要請されていた。それは「フッサールへの忠実さ」を完遂するものであっただろう。

しかし『発生の問題』において、こうした議論がなされることはない。本論の考えでは、この議論の不在という事実が、デリダが最終的には「現実存在」を特権視し、自身が見出した「現象学的還元」の両義性を十分に展開できなかったことを示しているように思われる。弁証法を「人間的實在」において論じる時、デリダは「還元」の契機を「人間的實在」の時間性へと還元し、フッサールの「観念論」に対する批判を強調しつつ、そこから距離を取ろうとすることで、逆説的にも弁証法を停止させ、自身の企図を完遂できていない。これが、われわれが『発生の問題』の企図の成否について提示する仮説である。

4. 結論

ここまでの議論を整理しよう。『発生の問題』は、フッサール現象学の観念論的性格への批判という一貫したモチーフによって駆動されている(第1節)。デリダは、そこで現象学の方法論たる「還元」を批判するのだが、他方でそれを改鑄することで「超越論的発生」を捉える議論の可能性をも示唆しており、とりわけ『経験と判断』の否定論にその契機を見出していた(第2節)。とはいえ『発生の問題』のデリダは、ハイデガーの実存主義的解釈に影響を受けた「人間的實在」の議論に依拠し、結局の

ところその議論を最終的に展開することはなかった（第3節）。この点に『発生の問題』の限界があるとわれわれは考える。

しかし、それは『発生の問題』が無視されるべき単なる若書きの論文であることを意味しない。むしろここで提起されつつも十分に答えを与えられていない「還元の徹底」や「否定」の問題系は、その後のデリダの思考を促し続けたように思われる。『発生の問題』再読という本論の範囲を超えるためここで詳述することはできないが、実際のところ、1960年代の多くの講義録においてこの「否定」の問題が集中的に論じられていることは、デリダ自身がこうした『発生の問題』の否定論に違和感を覚えていたことを示唆している（cf. 松田 2024）。そのなかでデリダは、フッサールの再評価やハイデガー解釈の深化を通じて『発生の問題』の立場から離れ、更に思索を深めていくことになる¹⁶。とりわけ「存在論的差異」の議論は、こうした「否定」の契機を存在論的位相にも認識論的位相にも回収しない道具立てを、デリダに与えることになるだろう。その思索は「差延」の主題へと結実することになる。

しかし、こうした後のデリダの思想の展開は、既に『発生の問題』のうちに存在していた「観念論批判」、そして「真の超越論的現象学」へと向かう議論の方向性の上に立つものとして理解することもまた、可能であるように思われる。『発生の問題』の可能性と限界を素描した本論の次の課題は、こうした議論がデリダ思想の発展の中で展開されていく過程をより詳細に跡付けることにあるだろう。その遂行は、別稿の課題となる。

追記：本研究は、JSPS 科研費 JP25KJ1726 の助成を受けたものである。

文献一覧

Derrida の著作を参照する際には、適宜略号を用い、引用・参照の際には原著ページ数と、続いて邦訳ページ数を記す（例：PG60/63）。引用文は基本的に既訳を尊重したが、適宜筆者の責任で表現を変更した。引用中 […] は省略、[] 内は引用者による補足を示す。

Derrida, Jacques. 1967, *L'écriture et différence*, Seuil./『エクリチュールと差異』谷口博史訳、法政大学出版局、2022年。（ED）

16. 1960年代のデリダの否定論と還元論に見られる『発生の問題』からの明確な転回については、中谷 2026 で論じた。

- . 1990, *Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*, PUF. / 『フッサール哲学における発生の問題』合田正人・荒金直人訳、みすず書房、2007年. (PG)
- Lawlor, Leonard. 2002. *Derrida and Husserl, The Basic Problem of Phenomenology*, Indiana University Press.
- 荒金直人 2005 「初期デリダのフッサール研究に於ける弁証法から差延への用語的移行」『フッサール研究』3:161-168.
- 植村玄輝 2018 「世界無化の考察によってフッサールは何をどこまで示したのか」『フッサール研究』15:1-23.
- 桐谷慧 2021 「現象学、存在論、弁証法 —— 初期デリダにおける「哲学」について——」『Résonances』12:14-28.
- 櫻田裕紀 2024 「サルトルの人間、デリダの幽霊 —— 「実存」をめぐる一つの遺産相続について——」『表象・メディア研究』14:91-112.
- 鈴木康則 2010 「初期デリダにおける超越論的哲学の問題」『フッサール研究』8:61-73.
- 長坂真澄 2012 「不可能性の可能性 —— デリダのフッサール読解から浮かび上がる信の概念——」『フランス哲学・思想研究』17:161-169.
- 中谷碩岐 2026 「ジャック・デリダ『思考』講義（1960-1961）の現象学的解釈」『立命館大学人文学研究所紀要』145: ページ数未定.
- 松田智裕 2020 『弁証法、戦争、解読 —— 前期デリダ思想の展開史——』法政大学出版局.
- . 2024 「意志の不安 —— デリダの初期セミナーにおける否定と無——」『思想』1207:181-192.